

# 難治性不妊症患者が妊娠・出産に至った症例の検討

1)はりきゅう あんずの種、2)はりきゅうアロマ 日々のあわ

松原麻実<sup>1)</sup>、熊坂由希子<sup>2)</sup>、須藤隆昭<sup>1)</sup>

【目的】専門の医療機関での一般的な不妊治療を2年間継続しても妊娠に至らない場合、難治性不妊症という。今回、一般不妊治療を10年以上継続し、高度生殖医療を行うも妊娠に至らなかった患者に対し、継続した鍼灸治療を行い妊娠出産に至った症例を得たので報告する。

【症例】38歳女性。主訴：挙児希望。現病歴：特になし。初診：2012年4月。

2002年より不妊治療を開始。各種一般不妊検査での異常はなし。タイミング療法・人工授精を2～3ヶ月に1回、5年間行ったが不妊状態が続く。2006年腹腔鏡手術でさらに詳しい原因を調べるも、異常なし。2007年1回目となる体外受精を行うが受精せず。その後、タイミング療法と人工授精などの治療を再開、2年間繰り返し行う。2011年には1回目となる顕微授精を行ったが妊娠せず。子宮形は双角子宮であるが、卵巣の器質的異常はなく、機能的にも特記すべき事項はなし。

【治療・経過】

2012年4月～2014年3月までの2年間で、本治法を含む全身調整の治療を7～10日に1回程度、計73回行った。また、鍼灸治療に加えてヨモギ蒸しやアロマセラピートリートメントを行った。2012年9月の移植では妊娠に至らず、2013年3月の移植では初の陽性反応が出るも、その後流産。2014年8月の移植で妊娠、2014年4月帝王切開にて52.5 cm、3802 gの男児を出産した。出産までに体外受精1回、顕微授精を5回行った。鍼灸治療前の子宮内膜は厚さ6～8 mm程度であったが、治療開始以後9.8 mmに変化した。また、治療前では採卵した卵子2個ともに受精に至らなかったのに対し、治療開始以後、採卵数は5～8へと増加し、いずれも初期胚・胚盤胞へと成長した。ARTを繰り返す毎に良好な結果を示した。

【考察・結語】

一般的にARTを繰り返し行うと妊娠率は低下していくと言われている。本症例において難治性の不妊症患者が妊娠に至った要因には骨盤内の血流改善、卵の質の向上と子宮内膜の状態が安定したことなどが考えられ、鍼灸治療がそれらに寄与する可能性が示唆された。また、不妊治療が長引くことで生じる精神的ストレスの緩和にも鍼灸治療は大きな役割を果たしたと考える。ただし、本症例は他の補完代替医療も併用しており、最も効果のあった治療法についての明確さに欠ける。今後は、医療機関との連携を深め鍼灸治療前後の詳細な変化や、エビデンスに基づく効果の高い治療法を研究していく必要がある。

キーワード 難治性不妊症 ART 心理的ストレス 不妊治療